

関係者ヒアリング結果概要

1 日時

令和6年10月18日（金）15時30分～16時44分

2 場所

オンライン開催

3 対象者

七尾市国際交流協会 大星 三千代 氏

4 対応者

出入国在留管理庁政策課外国人施策推進室 佐藤室長 ほか

5 内容

（地震当時の状況、支援等について）

- 私たち七尾市国際交流協会（以下「協会」という。）は、日頃から外国人住民、地域住民と連携して活動してきた。今回の地震でこのつながりが大きな力になった。連携団体から支援食のハラルやビーガン食対応の支援品が届いているという情報をいただき、それらの支援品を必要とする人に届けることができた。
- こちらからの状況確認や必要なものはないかと連絡をすると、被災した外国人住民は自分たちも厳しい状況の中であっても、逆に私たちのことも心配してくれる旨の連絡があった。でも、実際に被災した外国人のところに行ってみると、「水は大丈夫」と言っていたように、確かに飲料水はあったものの、生活水の不足に不便を感じている状況であることが分かった。
- 私たち日本人は生活水の井戸水提供場所等の情報が入ったので、困らなかったが、外国人住民はそういった情報を入手できず、配布された水（飲料水）を生活水として使うしかないという状況であった。
- また、刻々と変わる情報をなかなか理解できなかったり、救援物資の配給場所や入浴施設、コインランドリーの開設場所や申込方法が分からなかった。情報を入手し、理解できたとしても、自転車では行けずに困っていたことなど、実際に会って話してみても分かったことが多い。
- 地震発生日が1月1日という休暇中であったこともあり、金沢等に出かけている技能実習生もいたところ、地震の影響で電車が止まっているということに気付かず、駅に行って初めて帰れないということが分かった人がいた。
- 電車が止まっているという相談があったので、私も宿泊できる場所の情報を確認したが、その段階ではまだ受入れをしている情報を見つけられなかった。知り合いが受入れを快諾してくれたが、その帰れなくなっていた方が同国人の友人で金沢在住の方と連絡が取れて、その方のところへ行くことができて事なきを得た。
- 地震発生当初は津波のアラートが鳴っていたため、高いところに逃げる必要が

あると考え、高台に逃げたものの、同国の他の人たちは別の避難所に集まっていると情報が入ったため、津波の警戒アラートが終わった段階で避難所に行ったという人もいた。

- 高台と避難所のどちらに行けば良いのかや自分が今していることが正しいのかどうかなど判断できる情報が得られず、皆と一緒にのところにいた方が安心ということで、その場にいた人もおり、災害が起きたときは自分の国の言葉の情報は信頼できるし、同じ言葉の人と一緒にいると心が落ち着くという声もあった。
- 避難所に関してだが、ペット（猫）を避難所に連れて行って良いのかどうか分からず、困ったという外国人がいた。ペットを連れていける避難所の情報が得られず、県外に行くしかなかったとのことだ。その方はペットを3日間ゲージから1回も出せなかったそうで、その方もペットも困り果てたとのことであった。避難所に関するこういった情報発信や、避難所の対応も重要なことであると思った。

（広報誌「～あの時わたしは～」について）

- 被災した外国人住民と実際に会ってみて震災時の状況を聞いたときに、自分たちだけでとどめておくのではなくて、今後の備えのためにも、記録として残すべきと考え、外国人住民に「震災の記録として残してはどうですか」と提言したところ、「是非記録として残してほしい」という言葉が返ってきたので、冊子発行に踏み切った。
- 記録誌を発刊することを伝え聞いた七尾市外に在住の外国人住民からの原稿も多く集まった。
- 原稿の執筆に当たっては、実際に起きたことや出来事をありのままに書いてほしいという気持ちがあったので、日本語で書いてもらうということは難しいと考え、母国語で書いてもらった。また、文章ごとには名前は載せず、最後のページに皆さんの名前をまとめて掲載するということを伝え、自分の体験した状況をそのまま書いてもらえるような環境を作って書いてもらうようにした。
- しかし、書き上がった原稿を読むと、会社の人や地域の方々への感謝がたくさん書かれており、これならむしろ会社の名前や書いた人を分かるように載せてあげればよかったと思うような体験文が多かった。
- 能登地区において技能実習生は、これからも欠くことのできない人材で、会社にとって本当に大切な社員や家族として接してもらっているんだなということを私はこの体験文から感じる事ができた。

（発行するに当たっての課題）

- 原稿を依頼した際は、パソコン作成の原稿を想定していたが、実際に来た原稿は手書きのものが多くあった。

- 手書き原稿をデータ化するに当たって、一部は母国に帰った後もつながりがある元七尾在住外国人にも原稿のデータ化をお願いし、助けてもらった原稿もあった。
- 日本語への翻訳については、翻訳ボランティアの団体と連携して翻訳した。
- 記録誌発行は協会にとって予定外の事業のため予算計上していなかったのですが、発行するに当たって苦労したが、皆さんに支援してもらい発行することができた。

(発行後の反響)

- 発行後の反響としては、各メディアにも取り上げていただき、皆さんに1月1日の当時のことを知ってもらうことで、地震に対しての備えを学んでいただいているのではないかと自負している。
- 石川県で採用している中学3年生の英語の教科書に東日本を学ぶという単元があるそうで、県内の中学校の先生から、その授業の中でこの記録誌を使いたいというお話があったことをきっかけに、七尾市の中学校でも使おうということになった。最終的には石川県全部の中学校に使ってもらおうということとなり、急遽増刷し、公立、私立問わず、石川県内の全部の中学校に配布した。
- 新聞社等を通じて、いろいろなところに配信されるようになったことから、全国の自治体、国際交流協会や関連団体からの反響を多くいただいた。また、大学の先生たちからも多くの連絡をいただいているところ、私たちがどこまで協力できるのか分からなくて、反響の大きさに戸惑っている部分もある。

(情報発信等に関して)

- 災害情報は石川県や石川県国際交流協会も多言語で情報等をたくさん流してもらっていたが、外国人住民は普段から身近な相談相手や監理団体、職場に相談したり、そういった団体等から情報を入手したりしていたので、自治体等から情報を入手しようとする人は少なく、県や国際交流協会が多くの情報を発信していたが、なかなかその情報にたどり着けなかったのではないかな。
- 技能実習生の多くはWi-Fiの環境下でしか通信できない携帯しか持っていないので、Wi-Fiの環境がないところでは本当に身近な人から情報を得るしかなかったのではないかなと思われる。
- 協会は普段企業を通して外国人住民へ情報発信を行っている。あわせて、職場を超えてコミュニティリーダーがいる国もあるので、そういう人たちに発信すると早く伝わりやすいため、その人たちを通じての広報も行っている。

(外国人同士のつながりを作るための取組)

- 七尾市には多くのインドネシアの方が様々な業種で働いているところ、今回の

地震をきっかけに、七尾市内で同じ国の言葉を話せる者同士ということで、インドネシアの方たちが職場を超えてつながった。

- そのような状況も踏まえ、七尾市で8月にインドネシアのフェアをしようということになり、七尾市内のコミュニティをより強くするという観点から、企画や広報も全部インドネシアの人にお願ひし、協会はそれを見守るというかたちでフェアを実施した。
- また、能登半島豪雨災害は七尾市はあまり被害がなく、能登町は被害が大きかったので、インドネシア人の皆さんの中には、支援に関する情報の提供や言葉の支援、励ましなど、自分たちができる範囲での支援ができるのではないかと思っている方も多くいる。そのため、11月に七尾のインドネシアの人たちと一緒に能登町へ出向き交流を通して今後の支援につなげることを検討している。そのようなつながりを持つことにより、今後また何かが起きたときにお互いに支援し合ったり、励まし合ったりなど、地域を超えて支援のネットワークを広げていくことができると思っている。
- 記録誌にも書いている人がいたように、何かが起きたときには、同じ国の言葉を話す人同士のつながりというのは重要であり、その輪を広げるためにも企画を考えている。
- 協会はこれからも継続的な活動を通して外国人住民と地域の日本人住民の関係を広げていきたい。

以上